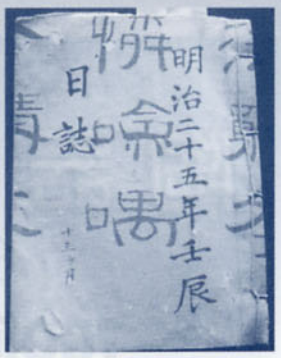


明治25年、橘常葉が記した日誌（橘家所蔵）

新発見！江越礼太晩年の日記

明治時代初期にあって、画期的な実業教育を推進した江越礼太。今年はその没後110年になります。過日、長崎県千々石町在住の橘周次郎さん夫妻が来館され、先祖の橘常葉（たちばなとこは）が記した明治25年から大正12年までの31年間、87冊にのぼる膨大な日記の中に、師であった江越礼太に関する記述や江越自身の日記があることを教えていただきました。

「常葉有田行日誌　登録」と明記された中に、明治25年１月31日の訃報を受け、有田に向かった常葉の動向が克明に記されていました。それらから江越礼太が有田小学校辞任後、長崎に赴いたのは旧知の中林梧竹が東京から長崎へ来るという知らせを聞いたためであること、その時病を得て最初は出島の香蘭社（支店）で養生していたことなどがわかりました。

江越死去の知らせを聞き、２月３日常葉は同行の者とともに千々石を発ちました。人力車を走らせ、翌４日正午過ぎに本幸平の旅館伊勢屋・手塚五平宅に到着しています。その足で白川黌内にあった亦楽亭（江越礼太宅）を訪ね、遺族に弔いの言葉を述べました。

翌日、再び江越家を訪れ、孝太郎・米次郎の遺児や久富・八雲・千布・本山の諸氏と共に霊前で語り合う中で、江越礼太が長崎へ赴いた折りの日記の存在を知ります。そしてそれを土産にしようと書き写しました。江越自筆のものは未発見で、今回初めてその日記の存在が明らかになったのです。

日記は明治24年11月28日に家を発ち、早岐から船で時津へ渡り、出島の香蘭社に着いた記事から始まっています。その後、小浜への旅行や同年10月の濃尾地方の震災を写した幻燈会を開いたりしていますが、12月6日、吉雄老医の診察を受けています。この吉雄老医というのはおそらく吉雄圭斎のことと思われます。彼はポンペ、ボードウィンなどに接触して新しい医学を学んだ人です。この日以来床につくことが多くなってきますが、病床の中でいくつかの漢詩をしたためています。その一つに次のような詩があります。

「　憶　家

窮途負債日加多又是今年空自過病在他郷無所告

不知家計果如何」

この詩からは、勉脩学舎を開校したものの志なかばで断念。さらに多額の負債を負い、異郷の地で病を得て残された家族を思う江越の無念さが伝わってきます。日記は亡くなる直前まで続きます。この間、中林梧竹や家族、弟子たちが再三訪れ、また、求められて揮毫をしたり、盛んに手紙のやりとりを行っています。明治25年の元旦には「病今朝全快」して、気持ちを新たに屠蘇を酌み交わしている様子が伺えます。

絶筆となった１月28日は、「朝後藤祐一之書状落手、返書出ス、金井俊行氏委嘱書画ヲ送ル」とあり、普段と変わらない様子が伺えますが、その後容体が急変し、31日午前６時、65年の生涯を閉じました。（尾崎葉子）

橘常葉は長崎県千々石の人。若いころ小城・有田にあった江越礼太の塾に遊学し、漢籍を学びました。その後殖産興業を志し、養蚕・製茶・製糸などあらゆる事業を展開し、のち学務委員や村会議員などを歴任しました。日露戦争で壮烈な戦死を遂げ、広瀬武夫中佐とともに軍神として喧伝された橘周太中佐は実弟。

江越礼太については、「有田町史　政治社会編Ⅱ、陶業編Ⅱ」、「江越礼太と勉脩学舎」などにあります。

季刊

皿山秋

No. 55

有田町歴史民俗資料館・館報

シリーズ　ザ・陶器市

陶器市物語

その３

～100回の歩み～

陶器市に関してよくある質問は、なぜ「磁器市」ではなく「陶器市」というのかというものです。確かに有田は日本で初めて磁器が焼かれた土地です。しかし、江戸時代の古文書などを見ると、磁器と陶器の区別は明確ではなく、皿山のことを「陶器仕立之場所」、泉山石場のことを「皿山陶器土床」などという表現が使われています。最近でこそ磁器と陶器の違いはよく知られたところですが、おそらくは焼き物を総称して陶器という言葉が使われていたと想像されます。

陶器市を始めた人々

陶磁器品評会に付随しての陶器市の始まりは、大正４年からというのが通説です。当時の「有田町役場日誌」によれば、「大正４年２月１日、当町産業上に関し藤井喜代作、深川六助、井手虎治来場。町長（久富三保助）と協議を凝らせり」という記事があります。具体的にはどのような協議がなされたか不明ですが、明治29年に始まった品評会もこのころになると、他地方からの来観客があまりにも少なかったので、何とかして客を呼ぶ方法はないものかということも議論されたようです。陶器市の起こりに関しては、一つにはこの季節に黒髪山のお遍路さんが有田を通っていたので、この人々を目当てに窯焼きや商人の奥さんたちが、蔵のなかに眠っている２級品を売っていたといわれ、もう一つには大正４年、有田町青年会が発足したことが大きな要因となったといわれています。

このことに関して、昭和39年６月30日付けの「有田町広報」に、泉山の池田卯一さんが「有田陶器市が生まれるまで」という一文を寄せています。そこには久富三保助氏を会長、深川六助氏を副会長、井手虎次・前田徳助両氏を幹事、深海龍一・庄村吉郎両氏を会計にし、各区から１～２名を委員に推薦して有田町青年会が発足し、池田卯一さんは納富英次氏とともに泉山区から選出されたことが記されています。

発会式は新築の有田小学校の講堂で行われ、深川六助副会長からは折角発足しても、金がなくては何の運営もできないというので資金集めの方法について検討がなされました。その結果、品評会が開かれる時、陳列館の前に紅白の幕を張り、各商店から陶器の下物を一斗ソーケに出してもらい、その売りさばきは青年会でやり、その代わりに売り上げ高一円に一本の抽選券を渡し、半分を青年会の費用にもらう。それには景品が必要なので、その景品は城島の食器、久保時の丼類、竹重の火鉢、江頭の錦付輸出品を始め香蘭社などから提供してもらったこと、初日はこよりで50本一組のクジを二組作って35本が引かれたけれど、一円の買い物品より景品が数倍の値打ちがあったので、次第に評判を呼び町内の人もどんどん来るようになったとあります。また、お客さんを集める方法として法元寺で骨董会を開き、香蘭社はじめ各有志から書画骨董を出してもらい、管理を青年会の責任で行ったり、また九州素人義太夫大会も開催しています。第一回目ながら好評だったため、次回からは各商店の前で売ってはという意見が出、陳列館より下の方にはお客がこないからという反対意見が出たけれど、二年目からは各店先に一斗ソーケやモロフタに並べて家族が直接売るようになり、今日の賑わいにつながっていったことを回想しています。ちなみに、大正４年の西松浦郡陶磁器品評会は５月８日から10日間開催されています。

陶器市の発想は、青年会の資金集めから始まったともいえますが、中には蔵に眠る二級品をいちいち洗って店先に並べるなど面倒だという意見もありました。しかし、六助達若者は「これが茶市のように一斉に行われ、例年の行事として定着すれば意外な発展があるかもしれない」と古老を説得したといわれています。

売り上げが伸びてくると青年会だけではとても力が足りないというので、当業者の賛同を得て協賛会が組織されました。今日の陶器市の成功の鍵は、まさにこの青年会を中心とした協賛会の働きにあったといえるのではないでしょうか。

（尾崎　葉子）

昭和38年に建てられた深川六助翁の碑
（陶山神社境内）

金ケ江三兵衛さんをご存じですか？

有田焼の陶祖として陶山神社の後方高台に祀ってある「李参平之碑」は、最近韓国からの来訪者の有田観光コースとして定着しています。李参平、日本名・金ケ江三兵衛について、多くの研究者や先人たちによってその功績に関しての調査がなされてきました。しかし、確たるものが少なく、遂には李参平は存在しなかったという話まで出てくるようになりました。

ところが、実際には現在初代から数えて14代目という金ケ江三兵衛こと金ケ江省平さん（41歳）が、稗古場の自宅で作陶に取り組んでいます。そして、このほど「平成14年度九州電力若手工芸家国内外派遣研修者」に選ばれ、近々先祖の故郷・韓国でその技を磨くために出発の予定です。

作陶中の金ケ江省平さん

《古文書に見る金ケ江三兵衛》

有田の始まりや、金ケ江三兵衛について書いたものは、古いものでは『鍋島直茂公譜』や『鍋島勝茂公譜』などに「日本の宝」にするため、「焼物上手にする者六・七人召し連れられ」て帰国したとあって、慶長の役の際に日本に連れて来られた朝鮮の人々によって焼き物（磁器）作りが始まったことが記されています。

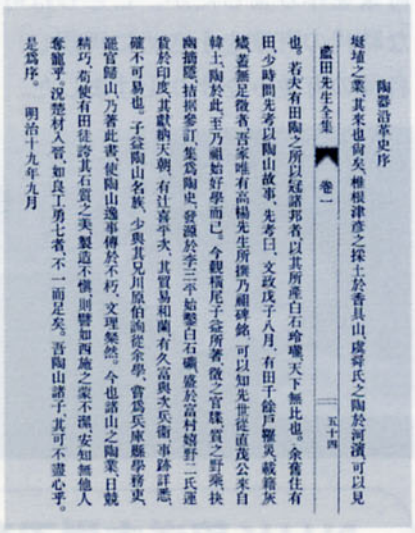
また、多久家文書と呼ばれる中に『肥陽旧章録』というものがあり、その中に「皿山金ケ江三兵衛高麗より罷越候書立」があります。これとほぼ同じ文が佐賀鍋島文庫の中の『多久家有之候御書物写』です。それらには「某事、高麗より罷渡り、数年長門守様え召仕えられ、今年三十八年の間、丙辰の年より有田皿山の様ニ罷り移り申し候」と書かれています。これが現在定説となっている、金ケ江三兵衛が元和２年（1616）に、有田皿山に移り住んだことの裏付けとなる資料です。この文書によれば、この時すでに三兵衛は148人の陶工集団を支配するようになっていたようです。

その後、資料の中では金ケ江三兵衛に関する記事は途絶えてしまいますが、明和７年（1770）『御屋形日記』の「申上口上覚」に再登場します。そこには「元祖金ケ江三兵衛と申す者」の功績によって、子孫の我々は代々御切米を頂戴していたが、財政逼迫でその拝領が叶わなくなった。しかし、先祖が頂戴していた御判物の写しもあることであり、多久家に対し先祖の功績により再度支援を願い出ています。

《李参平という言葉はいつから》

この文書の中に「我々名字最前高麗ニ而相名乗候は、李名字ニ而御座候、高麗在産金ケ江と申候義被聞召上、在名を被遊御用、金ケ江被召成候事」とあって金ケ江家の元の名が李であったことがわかります。

また、稗古場の金ケ江家には、初代から数えて６代目の時に多久家に提出された文書があり、その中に「右唐人参平、子を設候は某先祖金ケ江三兵衛ニ而御座候」という一文が出てきます。これらの文書の中の「李」と「参平」を合わせて「李参平」という名前になり、この表現を最初に使ったのが谷口藍田で、明治19年に著した『陶器沿革史序』の中に「発源於李三平始鑿白石礦」という表現をしています。さらに翌20年に久米邦武が著した『有田皿山創業調子』の中にも、「李氏三平」という表現を見ることができます。



陶器沿革史序

藍田先生全集　卷一　五十四

陶器沿革史序

埏埴之業、其來也尚矣、椎根津彦之採土於香具山、虞舜氏之陶於河濱、可以見也。若夫有田陶之所以冠諸邦者、以其所産白石瑰瓌、天下無比也。余舊住有田、少時聞先考以陶山故事、先考曰、文政戊子八月、有田千餘戸罹災、載籍灰燼、蓋無足徵者、吾家唯有高楊先生所撰乃祖碑銘、可以知先世從直茂公來自韓土、陶於此、至乃祖始好學而已。今觀楊尾子登所著、徵之官牒、賞之野乘、挾陶揣隱、指掎參訂、集為陶史、發源於李三平、始鑿白石礦、露於富村、嬉野二氏運貨於印度、其獻納天朝、有辻喜平次、其貿易和蘭、有久富與次兵衛、事跡詳悉、確不可易也。子登陶山名族、少與其兄川原伯詢從余學、嘗為兵庫縣學務吏、遷官歸山、乃著此書、使陶山遺事傳於不朽、文理粲然。今也諸山之陶業、日競精巧、苟使有田徒誇其石質之美、製造不慎、則譬如西施之梁不潔、安知無億人奪寵乎。況楚材入晉、如良工勇七者、不一而足矣。吾陶山諸子、其可不盡心乎。是為序。　明治十九年九月

陶器沿革史序

これらのことから、「李参（三）平」という言葉は明治期の研究者によって始められた表現だと思われます。つまり、陶祖李参平こと金ケ江三兵衛は、江戸時代より繰り返しその功績が取り沙汰されながらも、窯焼き業を継続して営んではいなかったことで、その存在すら否定されかけたのではないでしょうか。

有田焼の始まりからもうすぐ400年です。14代目の時代となって、どのような作品が生み出されるのか期待されるところです。

こんなこと、ありました。

古文書初級教室の開催

今年度より初めての試みで、古文書教室の初心者教室を開催しています。指導していただくのは赤絵町の蒲地豊さん。教えるためには自分も勉強しなくてはと事前学習を重ね、本番では時代背景や当時の有田皿山の様子を説明しながら教室は進められています。

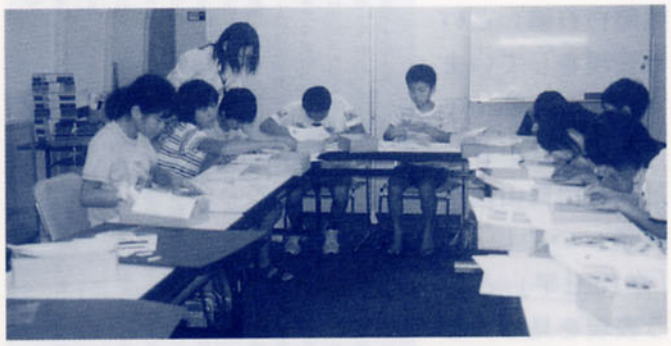
テキストは泉山・池田家の「御達帳」という文書で、幕末頃の焼き物取り引きの様子が記されていて、読みやすい崩し字ながら、初心者にとっては難物です。

しかしながら、回を重ねていく中で崩し字が読めるようになるとその魅力は増していくものと思います。

町家の模型教室開催

一昨年から始めた町家の模型教室ですが、現在有田町で進められている伝統的な町並み保存事業の普及活動として、将来有田を背負っていく子供たちに有田の良さを知ってほしいという願いもあります。

町内外の小学校４年生から６年生までの参加者15名は、８月19日、20日の２日間カッターや絵の具を使って、作業を進めました。昨年は百分の一の縮尺で町家を作りましたが、ことしは町並みに挑戦。いろんな時代の町家を小さめに再現し、それらを並べて各人各様の町並みを作り上げました。



NHK放送大学で有田を紹介

ＮＨＫでは昨年「歴史みちウォーキング」で有田の町を紹介しましたが、今年はＮＨＫ放送大学で「労働が社会を生産する」をテーマに８月に取材し、３年間にわたり、講義の中で紹介することになりました。

内容としては①自然と労働の代謝について　②勤労の精神について　③分業と協業について　④機械生産と労働についてとなっています。この放送によって放送大学の皆さんが有田に目を向けていただけたらと願っています。

ペンジャラ　景気のトレンドを読む

館報にふさわしくないテーマですが、有田の景況が余りにも厳しく、これからどうなるのかの不安もあります。このようなことから景気はどうなるのか、キーポイントを書きます。参考になれば幸いです。

結論から言えば、新聞紙上では景気は底を打ったと述べていますが、そうではなく当分は厳しさが続くと覚悟してください。そこにはＡ・Ｂ・Ｃのキーポイントがあります。

Ａ・アメリカの動向です。１～３月のＧＤＰはアメリカ6.1％、日本5.7％でしたが、ワールドコムの破綻をはじめ通信機器業界の不透明感が足を引っ張り、９月頃までＧＤＰも半分以下になりましょう。

Ｂ・バンク。不良債権の処理等々、銀行内部の事情で、厳しい状況が続きます。

Ｃ・カレンシー（通貨）外国為替マーケットを見れば１ドル116円前後（7月24日）ですが、日本の好調産業である事務機器、自動車業界は１ドル120円で取り組んできただけにボディブローのような影響を受けるでしょう。

このように厳しい環境の中にあっても、成功している企業があります。その特徴は次の通りです。

1. 勝ち組企業の規模は小さい。日経新聞調査によれば、負け組平均従業員数142人に対し、勝ち組は76人と約半分です。
2. 最近は海外生産は眼が中国などに向きがちですが海外生産は負け組14.5％に対し、勝ち組は4.4％です。
3. 勝ち組企業はトップダウン型で、社長がトップセールスを行い、社長室に居ることが少ない。常に危機意識を持ち、危機感を社内で共有化しています。
4. 持株比率が高い。言うまでもなく、社長をはじめ経営陣の持株比率が高いということです。
5. 社長の後継者には、身内を考えています。子供は「おやじの背中」をいつも見ています。一番の理解者のはずです。キャノン、リコー、ホンダは創業者の精神が今に受け継がれています。

以上が勝ち組企業の特徴です。トップは高い志を持ち、社内への意識づけをする、成功企業に学ぶ、明確な戦略・ビジョン・実行力を持つ、言い訳に外部環境を理由にしない。即ち自分の城は自分で守る、強い意志が今こそ求められています。

有田は過去、何度となく不況を乗り越えてきました。先人の偉業を振り返り、皆が勝ち組企業になって欲しいと願わずにはいられません。　（久富桃太郎）

季　刊『皿　山』

通巻55号（平成14年９月１日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185